『ロドギュンヌ』

村　瀬　延　哉

(1)

コルネイユの悲劇『ロドギュンヌ』は，1644年末から45年初めにマレー座で初演されたらしい。マルティ＝ラヴォーなどブルゴーニュ座初演説を採る者もあるが，優勢をしめるとは言い難い。[1] 作品の出版は2年後の47年1月であった。当時は，戯曲が一たん出版されると，どの劇団でも上演が可能になった。従って，出版の延期は，『ロドギュンヌ』の人気のほどを示しているのであり，その間マレー座に上演権を独占させる狙いがあったと考えられる。

上記以外にも，『ロドギュンヌ』の人気を裏づける証拠には事欠かない。1676年10月ルイ十四世が，老作家の名誉を称えて，ヴェルサイユ宮殿で悲劇を演じさせるが，この時『エディップ』，『セルトリュス』と並んで『ロドギュンヌ』が選ばれた。また1750年になって，貧苦にあえいでいたコルネイユの甥に経済的援助を施すため，王立劇団によって演じられたのもこの悲劇であった。[2]

19世紀には人気を失ったものの，結局『ロドギュンヌ』は1680年から1942年5月1日までの間に，コメディ＝フランセーズで429回上演された。コルネイユの作品の内で，所謂四大傑作と『嘘つき男』を除けば，最多上演回数を数える。[3]

コルネイユ自身が，この戯曲を偏愛した人物の一人だった。

> On m'a souvent fait une question à la cour: quel était celui de mes poèmes que j'estimais le plus; et j'ai trouvé tous ceux qui me l'ont faite si prévenus en faveur de *Cinna* ou du *Cid*, que je n'ai jamais osé déclarer toute la tendresse que j'ai toujours eue pour celui-ci, à qui j'aurais volontiers donné mon suffrage si je n'avais craint de manquer,

en quelque sorte, au respect que je devais à ceux que je voyais pencher d'un autre côté.[4]

（私は宮廷で，私の劇のうちで一番高く評価しているものはどれかと，よく尋ねられました。こう質問した人達がそろいもそろって，最初から『シンナ』や『ル・シッド』を好んでいるのは分っていましたから，私が終始一貫この作品（＝『ロドギュンヌ』）に抱いていた愛着の念を決して公言しませんでした。でも，もし当然払うべき尊敬の念を，他の作品を好んでいるのが明らかな人々に，なんらかの遣り方で，欠く恐れがなかったとしたら，喜んで一票をこれに投じたでありましょう。）

彼が『ロドギュンヌ』を好んだ理由は，当人の証言に従えば，二つ考えられる。

第一は筋の組立ての面白さ，場面を追って盛り上っていく構成の巧みさである。作者は，製作の過程でこの点に心血を注いだのであり，他の作家からの借りものでない独創性が，彼のどの作品よりも発揮さていると言えよう。『ロドギュンヌ』への愛着を，子供に対する父親の愛情にたとえた後，コルネイユは，こう続ける。

peut-être y entre-t-il un peu d'amour-propre, en ce que cette tragédie me semble être un peu plus à moi que celles qui l'ont précédée, à cause des incidents surprenants qui sont purement de mon invention, et n'avaient jamais été vus au théâtre;[5]

（多分そこには若干の自尊心がまじっている。というのも，今だかって舞台上で見られたこともないような，純粋に私の創造になる数々の驚くべき事件のおかげで，この悲劇が，それ以前の悲劇よりも，ずっと自分のものだという感が強いからなのである。）

第二の理由は，1660年に発表された『劇詩論』中で，悲劇の主人公クレオパートルの魅力を称えたものである。

Cléopâtre, dans *Rodogune*, est très méchante; il n'y a point de parricide qui lui fasse horreur, pourvu qu'il la puisse conserver sur un trône

qu'elle préfère à toutes choses, tant son attachement à la domination est violent, mais tous ses crimes sont accompagnés d'une grandeur d'âme qui a quelque chose de si haut qu'en même temps qu'on déteste ses actions, on admire la source dont elles partent.[6)]

(『ロドギュンヌ』のクレオパートルは非常に邪悪である。彼女が何よりも愛着する王座にとどまりうるのなら，極悪非道の罪を犯すことも恐れない。それほど権勢欲が強い。しかし，彼女の犯罪はすべて，何かしら非常に高貴な魂の偉大さを伴っているので，その行為を嫌悪しても，それが生れる根源にあるものには，感嘆の念を覚える。)

権勢欲のために夫と息子を殺し，残った息子とその婚約者の毒殺を企てる女性を，これほど率直に賛美してよいものかという疑問は残る。しかし，『ロドギュンヌ』の面白さが，クレオパートルを抜きにして語れないのも，自明の理であろう。

以下我々は，作品の興味がどの辺りにあるのかを，作者の指摘した二つの観点から，検討していく。その前に，粗筋を紹介しておこう。

(2)

舞台は，紀元前2世紀のシリア。女王クレオパートルは，最初の夫ニカノール王を殺害して王位を守った。戦死したと思われていた王が，敵国パルティアのフラアト王の妹ロドキュンヌと婚約したのを知り，二人の帰途を襲ったのである。ロドギュンヌは女王の捕虜となる。しかし，その後戦局はシリアに不利に推移する。クレオパートルはやむなく，王位を息子に譲り，新王とロドギュンヌを結婚させるという条件で，和平に応じる。彼女には，セルーキュス，アンティオキュスという双子の息子がいるが，出生の秘密を知る母親から，長子と認められねば王位につけない。

二人の王子は，共にロドギュンヌを愛している。しかし，固い兄弟愛に結ばれた彼らは，どちらが新王に選ばれようと，恨みを抱かないと誓い合う。一方，ロドギュンヌは，女王が善良そうな表面の陰で，残忍な報復を企てているのではないかと恐れている。また，王子の一人をひそかに愛しているが，誰であるか明らかにしない（一幕)。

実際クレオパートルの胸中には，権力へのすさまじい渇望とロドギュンヌへの憎悪が渦まいている。彼女は息子達に，ロドギュンヌを殺した者を

王にすると通告する。落着きをとり戻した兄弟は，どちらかが王位につけば，母親の意向など恐るに足りないこと，従って，ロドギュンヌこそ新王を指名する資格があると気づく（二幕）。

女王の腹黒い企みを知ったロドギュンヌは，パルティアの使節オロントに忠告を求める。彼は，クレオパートルの宮殿にとどまり，彼女に恋する王子達を味方につけて，王妃の座につくよう勧める。忠告に従ったロドギュンヌは，求婚者に，母親を殺した方を夫にすると告げる。セルーキュスは，この苛酷な要求を前にして，半ば自暴自棄に陥り，王冠もロドギュンヌもアンティオキュスに譲ると，言い出す。しかし，冷静なアンティオキュスは，彼一人でも二人の女性の説得にあたろうとする（三幕）。

アンティオキュスの願いを聞きいれ，ロドギュンヌは要求を取りさげる。と同時に，彼こそ意中の人物であると告白する。一方女王も，息子の懇願に心動かされた様子を見せる。そして，アンティオキュスが長子であると知らせる。だが実際には，彼女の野心と憎悪は少しも衰えていない。アンティオキュスが彼女の意に従わないと分ったので，セルーキュスの嫉妬をかきたてるため，芝居をうったのである。母親の策略を見抜いたセルーキュスは，挑発にのらない。クレオパートルは絶望し，三人の殺害を決意する（四幕）。

セルーキュス暗殺を果した女王は，婚礼の盃に毒をもって，残る二人も殺そうとする。盃が新王の手に渡った時，暗殺の知らせが入る。しかも，セルーキュスは死の直前に，王子達にとって真に愛しい者の手にかかって命はつることになったと，言い残している。女性達の間で，罪を相手に被そうとして論争が始まる。板ばさみに陥ったアンティオキュスは，儀式を続行する。彼が毒杯を手にすると，ロドギュンヌが，女王の用意した盃は危険だと警告する。これまでと悟ったクレオパートルは，せめて息子を道づれにと，毒杯を飲んでみせる。しかし，疑いをといたアンティオキュスが口をつける前に，薬がききめを現して，彼女は死ぬ（五幕）。

（3）

『ロドギュンヌ』の出典として，コルネイユが挙げるのは，2世紀のギリシアの歴史家アッピアノスの『ローマ史』，これとほぼ同時代のユスティヌスの『万国史』，旧訳聖書外典の『第一マカベア書』，および1世紀のユダヤ人史家フラヴィウス・ヨゼフの『ユダヤ古代史』である。[7]

これ以外にも二，三の小説がコルネイユに影響を与えたと噂されているが，いずれも真憑性に乏しい。一つは，18世紀の風刺歌作者 Laujon が所有したと伝えられる中世修道僧の小説である。Laujon によれば，小説の筋立てが『ロドギュンヌ』と余りにも似かよっているので，コルネイユが読まなかったとは信じられない。つまり，盗作をしたという訳である。彼の話には続きがある。小説の噂を聞いたヴォルテールが，執拗に閲覧を申し出た。しかし，コルネイユの熱心な崇拝者であった Laujon は，大作家の名声を汚すのを恐れて，本を貸さなかったばかりか，遂には焼き捨ててしまった。[8] 今日このエピソードを信じる文学史家はいないだろう。

ところで，ヴォルテール自身も，『ロドギュンヌ』と同じ題材を扱った小説があったと仄めかしている。まず，実際に見たわけではないと断った上で，《Sommaville 社で印刷された八つ折り版の仮綴本》が，コルネイユの作品と，次に述べる Gilbert の『Rhodogune』[9] の種本になったらしいと書いている。しかし，この小説の存在も確認されていない。彼はまた，1668年に印刷された別の小説にも言及している。[10] 『Rodogune ou l'histoire du grand Antiocus』という題名で，これは実在する。ただし，年代的に見て，コルネイユの悲劇以降に書かれたもので，小説の作者が，コルネイユをロドギュンヌの名を始めてフランスに紹介した人物とみなしている位だから，悲劇の出典とはなり得ない。[11]

『ロドギュンヌ』初演の数ヶ月前に，パリで Gabriel Gilbert の同名の悲喜劇が上演された。二つの戯曲は，最終幕を除いて，全く同じようにストーリーが展開する。ただし，Gilbert の五幕では，主人公の女王が悔悛し，息子と，コルネイユのロドギュンヌにあたる Lydie の結婚を認める。また，もう一人の息子も Lydie の妹と結ばれる。このハッピー・エンドの幕切は，コルネイユが五幕で行なった悪徳と不安の完璧な描写，あの戦慄を伴った陶酔を，観客に味わわせてくれるとは思えない。しかし，二つの作品がこれほど似かよっている以上，どちらかが盗作であることは間違いない。フォントネルは，『ロドギュンヌ』の草案を打明けられた口の軽い人物が，Gilbert にもらしたのだと述べているが，[12] 裏づけとなる証拠に欠ける。

もっとも，何らかの手段で，Gilbert がコルネイユを模倣したのは否定できないようだ。ランカスターは，次の点をその論拠としている。Gilbert は，コルネイユと違って，戯曲の出典を明らかにしておらず，自分

の独創だと主張するのでもない。彼の悲喜劇では，人物名と地名が，コルネイユのものと全く異っているから，もしコルネイユが実際出典にあたっていなければ，先に挙げた『ローマ史』等の書名を列挙することは不可能なはずだった。[13)]

確かに，Gilbert の作品にもロドギュンヌが登場するが，奇妙なことに，これはコルネイユの悲劇のクレオパートルにあたる人物である。模倣する際，劇の題名が，主人公の女王を指すと勘違いしたのであろう。因に，コルネイユが，題名に主人公の名をつけなかったのは，史上名高いエジプトの女王で，『ポンペーの死』にも登場したもう一人のクレオパートルと混同されるのを恐れたからである。[14)]

以上『ロドギュンヌ』の出典と，出典をめぐる幾つかのエピソードを紹介した。では，作者の創造になるのはどの部分か。彼が史実を変更したり，新たに創作したりした項目を，彼の言に従って，箇条書きにしてみる。1）史実ではクレオパートルの夫の正式名は，デメトリユスであったが，音韻の都合上，仇名のニカノールの方を採用した。2）ロドギュンヌはニカノール王の妻であったが，これでは二人の王子が義理の母を恋することになるので，婚約者とした。3）二人の王子の出生順を不明にした。4）ロドギュンヌがシリアに来たという記録はないが，クレオパートルに囚われたものとして登場させる。5）クレオパートルのロドギュンヌへの憎悪。6）女王が二人の息子に，ロドギュンヌを殺せと命じたこと。7）彼女の方も身を守るため，二人に同様の提案をしたこと。8）彼女がアンティオキュスを愛していたこと。9）激怒した女王が，彼女の臣下になる位なら息子達を殺そうと決意したこと。10）史実ではアンティオキュスが無理やり母親に毒薬を飲ませるのだが，観客の共感を彼に向けるため，彼女自身の意志で飲むこととし，アンティオキュスを honnête homme として描いた。[15)]

要するに，劇的展開をもたらす主要な要素は，ほぼ作者の創作である。特に五幕では，恐怖の感覚が，視覚に訴える小道具によって増幅される。登場人物の手から手へ渡る毒杯である。もっぱら朗々たるセリフの交換から成り立ち，必ずしも視覚的ではないフランス古典劇にあって，『ロドギュンヌ』はこの点でも，異色の作品と言えるだろう。

しかし，葛藤からサスペンスへとストーリーを組み立てるために，作者がかなり無理をしたと思える部分もある。たとえば，ロドギュンヌの言動

に見られる矛盾。一幕では彼女は，クレオパートルの報復を恐れる可憐で，ひ弱い存在にすぎない。ところが三幕になると，結婚とひきかえに二人の王子に母親の命を要求する。このマキアヴェリズムは，オロントの忠告があってのことだが，結果だけみれば，セルーキュスが指摘する通り，残忍狡猾なクレオパートルと変るところがない。

・・・Une âme si cruelle/Méritait notre mère・・・[16)]
（このような残酷な魂は，我々の母上にこそふさわしかった…）

しかも，四幕で愛するアンティオキュスに要求の撤回を求められると，分別ある態度をとり戻し，講和の条件通り王位に着いた者と結婚すると答えて，これに応じる。だが，これほどやすやすと撤回されるとしたら，彼女の本性にもおそらく似つかわしくなかった三幕の唐突なる要求は何だったのか。作者が，母親をとるか恋人をとるかという切羽詰った二者択一の状況を作り出そうと，若干不自然な行動を登場人物にとらせたと考えるのが，妥当ではないだろうか。実際三幕四場で王子達に求められた時，彼女は素直に真情を吐露して，アンティオキュスを夫として選ぶこともできたはずである。

この他にも，ささいな欠点をあげつらうことは困難でなかろうが，全体としてみれば，『ロドギュンヌ』はクライマックスの五幕に向って，一種のシンメトリーを保ちながら，巧みに構成されている。ただ，このサスペンスと盛上りも，クレオパートルという主人公を抜きにしては語れない。三幕のロドギュンヌの提案を別にすれば，劇の展開につながる行為は，ほぼ彼女によってもたらされる。従って，この行動力あふれる悪徳の権化が，どこまで我々を納得させ得る人物であるかによって，劇の感動が決ってくる。

（4）

クレオパートルは，果して作者が言うように，凶悪さの背後に《何かしら非常に高貴な魂の偉大さ》を秘めているか。高貴と言わないまでも，犯罪へ走る激情の中に，我々にも理解可能で，共感を呼ぶ点が存在するか。あるいは，人間性を完全に失った怪物にすぎないのか。この問いに答えるには，彼女の行動の動機と，心理の動きを仔細に検討する必要があろう。

犯罪者としてのクレオパートルの特徴は，冷徹さにある。彼女は，多くの犯罪者がそうであるように，一時の衝動に駆られて罪を犯すのではない。彼女は徹底した計画犯であり，立案から実行に至る過程で，後悔したりためらったりすることがない。[17)]

彼女の行動が，支配者たらんとする欲求つまり権力意志から発していることは言うまでもない。1647年から60年までの版で，クレオパートルは，まさにこと切れんとする寸前にこう言っている。

> Je n'aimais que le trône,[18)]
> （私は王冠しか愛さなかった。）

彼女には，夫婦や肉親の情が欠落している。息子達の前で，彼らを愛する母親の役を演じてみせるクレオパートルの厚顔さは，コルネイユ劇の数ある偽善者達の中でも特筆に価する。加えて，国難の折二人の兄弟は母親から引き離され，異郷の地で育てられたので，彼らが嘆くように，母の愛はなおのこと薄い。

> De ses pleurs tant vantés je découvre le fard; /Nous avons en son cœur, vous et moi, peu de part: /Elle fait bien sonner ce grand amour de mère, / Mais elle seule enfin s'aime et se considère;[19)]
> （どんなに恩きせがましく涙を流したところで，化けの皮ははげている。私達は，君も私も，彼女の胸の内で，何ほどの意味も持ちはしない。たいした母性愛を鳴りもの入で宣伝なさっても，あの人が愛しているのは自分だけ，大切なのも自分だけだ。）

クレオパートルの前夫に対する感情にも，異様な冷たさがある。彼女の告白を聞いてみよう。

> ··· Sans violence aucune/J'aurais vu Nicanor épouser Rodogune, /Si, content de lui plaire et de me dédaigner, /Il eût vécu chez elle en me laissant régner. /Son retour me fâchait plus que son hyménée, /Et j'aurais pu l'aimer s'il ne l'eût couronnée.[20)]
> （ニカノールがロドギュンヌの愛を得て，私を捨てることだけで満足

し，彼女の許にとどまって，私を支配者のままにしておいてくれたなら，彼女と結婚するのを見ても，私は力に訴えることなどなかったでしょう。彼の帰国が結婚より私を怒らせたのです。もし彼が，あの女を王妃の位に着けようとしなかったら，彼女を愛することもできたでしょう。)

王座への愛着が，世俗の感情をほとんどストイックとも言える潔癖さで拒絶する。マクベス夫人を思わせるこの女王のモットーは，

Sors de mon cœur, nature · · ·[21]
(自然な人間らしさなど，私の心から消えてうせろ。)

という台詞に要約できよう。野心の前には，愛情も嫉妬も姿を消す。《反自然》こそ，彼女の信条である。

しかし，異論も存在する。クレオパートルは純粋に野心だけから，ロドギュンヌと息子達の命を狙ったのではない，きわめて女性的な嫉妬の念が彼女を動かしたのではないかと，ドゥブロヴスキーは問うている。

· · · la《haine》de Cléopâtre pour Rodogune, qui se donne complaisamment pour *amour du trône*, est, en fait, *jalousie de femme*, et pas seulement de reine.[22]
(クレオパートルはロドギュンヌへの憎しみを，王冠への愛着だと称して得意になっているが，実のところ，それは女としての嫉妬の表れであって，女王としての嫉妬だけではないのである。)

彼が論拠の一つするのは，五幕での絶望した彼女の独白である。

Reste du sang ingrat d'un époux infidèle, /Héritier d'une flamme envers moi criminelle, /Aime mon ennemi, et péris comme lui.[23]
(不実な夫の忘恩の血をひく最後の生き残りよ，私に弓ひく邪悪な恋を彼より引き継いだ者よ，私の敵を愛し，彼のように死ぬがよい。)

アンティオキュスを責める彼女のモノローグには，夫を奪った女に対する

憎しみと，その女を性懲もなく愛してしまった息子への怒りがストレートに表現されている。これでは，世の常の愛憎の世界に生きる女性達とクレオパートルの間に，何の相違もないではないか。

もっとも，目的と手段の関係を，厳密に区別して考えるのは難しい。野心が目的なら，ロドギュンヌ殺害は王座に至る手段にすぎない。しかし，嫉妬が原因なら，殺害が主目的となって，ドゥブロヴスキーの言うように，野心は口実になる。実際には，両者は混然一体となっている。そこで，クレオパートルは嫉妬の入り混った権力欲が原因で，邪悪な行動に走ったと言っておこう。この行動の過程で，彼女の心理はどのような展開をみせるか。

まず，何よりも怜悧な宮廷人であるクレオパートルは，自分の非力さ，弱点を十分心得ている。彼女が初めて舞台に登場する二幕冒頭に，次のような台詞がある。

> Et vous, qu'avec tant d'art cette feinte a violée, /Recours des impuissants, haine dissimulée, /Digne vertu des rois, noble secret de cour, /Éclatez, il est temps, et voici notre jour.[24)]
>
> （そしてこの欺瞞が実に巧みに隠し続けてきたもの，弱者達のよりどころでもあれば，王者たるものの見事な美徳でも，また宮廷の気高い秘密でもある汝，心に秘められた憎しみよ，表に現れるがよい。今やその時。お前と私の出番が来たのだ。）

この独白は，表面は美辞麗句に飾られていても，その実，憎しみと権謀術数が往行する宮廷の実態を的確に表現している。そして，クレオパートルもまた紛れもないその一員，欺瞞と偽善を武器に陰謀を企てる典型的宮廷人なのである。

ただし，ここで彼女が《弱者》という言葉を使って，己れの力の限界を明らかにしているのは興味深い。彼女が弱者なのは，直接的にはパルティアとの戦いに敗れたからだが，根本的には，女性であることに帰因する。ニカノール死去の虚報が流れた後，何故意に反して王の弟と結婚しなければならなかったか。

> Le peuple épouvanté, qui déjà dans son âme/Ne suivait qu'à regret les

ordres d'une femme, /Voulut forcer la reine à choisir un époux.[25)]
（パニックに陥った国民は，既に内心では女の下す命令にしぶしぶ従っていただけだったので，無理にでも女王に夫を選ばせようと望んだ。）

いかに女王の地位にあったところで，彼女一人では国民を意のままに従がえることはできない。軍隊を統率でき，しかも自由に操れる国王が必要である。

クレオパートルの戦略は出来上っている。兄弟のうち，宿敵ロドギュンヌの命を断って忠誠心を明らかにした者を王位につける。そして，新王に，フラアト王がアルメニア軍と戦っているすきをついて，シリアの地からパルティアの勢力を一掃させる。[26)] もっとも，彼女に新王をいつまでも生かしておく積りがあったかどうかは疑わしい。二人の王子を反目させ，好都合なように利用した上で，破滅させるのが彼女の作戦と考えられるからである。[27)]

周到な計画が水泡に帰すのは，言うまでもなく二人の結束が予想以上に固かったからである。王子達は，陰謀以外に頼るもののない母親の政権基盤の脆弱さを一早く見抜いた。二人が合意の上で，一方を王としてたてれば，母親の意向など恐るに足りない。

Régnons, et son courroux ne sera que faiblesse:[28)]
（国王の地位に着こう。そうすれば彼女の怒りなど空しいあがきにすぎない。）

かくて，計画は挫折する。一体この後，無力な女王にどのような手段が残されているか。人の心に悪意しか見ない彼女からすれば，息子とロドギュンヌの結婚を認めたところで，二人の復讐が待っているだけだ。仮に，彼女の身に危害が及ばなかったとしても，権力の座に慣れた女王の嬌慢さは，今さら臣下の恥辱に耐えられない。

Je perds moins à mourir qu'a vivre leur sujette.[29)]
（彼らの臣下となって生き延びるより，死ぬ方が失うところが少ない。）

耐えしのんで，次のチャンスを窺うといった粘り強いやり方は，彼女の発想にない。

絶望の極に達したクレオパートルは，命と引き換えに王子とロドギュンヌの殺害を決意する。

> Dût le peuple en fureur pour ses maîtres nouveaux/De mon sang odieux arroser leurs tombeaux, /Dût le Parthe vengeur me trouver sans défense, /Dût le ciel égaler le supplice à l'offense, /Trône, à t'abandonner je ne puis consentir;[30]
> （たとえ民衆が，新しい君主を慕って怒り狂い，私のおぞましい血潮を彼らの墳墓に注ぐとしても，復讐に燃えるパルティアの前で，私が孤立無援になろうと，あるいは天が破廉恥な罪にふさわしい罰を下すとも，王冠よ，私が自らの意志でお前を手離すことはない。）

今となっては復讐こそ，彼女の最後の慰めなのだ。死を賭した彼女の憎悪，特にロドギュンヌへの憎悪は，劇の圧巻をなす。

> Tombe sur moi le ciel, pourvu que je me venge,[31]
> （復讐がかなうのなら，天罰が私の頭上に下されても構わぬ。）
> Il est doux de périr après ses ennemis;[32]
> （敵の後に死ぬのは，心良い。）

以上クレオパートルの行動の動機と心理の変化を，場面を追いながら分析した。彼女は怜悧で，危険を恐れぬ行動力に富んだ女性である。感情のしがらみに負けて目的を放棄することもない。動機を別にすれば，その強烈な意志力は，コルネイユの代表的英雄達と異るところがない。ロドリーグにおける家門の名誉，オラースの愛国心，ポリュークトの信仰心が，彼らを親愛なる愛情の絆に背かせたように，彼女の野心は，夫も息子も犠牲にして進むように命じた。通常の人間が幸福を得る上で，重要な意味を持つ愛情関係は，英雄的行為を実行したり，人並はずれた自由を求めたりする場合には，逆に強い束縛として作用することがある。コルネイユの主人公は，そのような意味で，あえて幸福を捨て，孤独の中に栄光と自由を追求する狩人である。ほとんど病的な野心にとりつかれたクレオパートルも

また，こうした孤独な戦士の一人と言えよう。彼女とその作者について，ナダールは次のように書いている。

> Il isole et *nous fait admirer* ce qui lui paraît essentiel dans l'homme au delà du bien et du mal, au delà du bonheur et de la vie même, à savoir notre volonté de puissance et d'être, c'est-à-dire au fond notre sentiment d'indépendance intime, notre liberté.[33)]
> （彼は，人間において本質的と思えるものをとり出してみせ，我々の感嘆を誘う。それは善悪も，幸福や生命さえ越えたものである。つまり我々の力と存在の意志，言い換えれば結局，我々の内面的独立の感情，我々の自由である。）

確かにナダールのように，クレオパートルの権力意志を，人間にとって本質的な自由の探求と呼ぶことも不可能でないかもしれない。彼女の野心は，隷属の拒否や，己れの意志が外部の圧力によって曲げられることへの反発といった側面を持っているからである。

しかし，先に挙げたロドリーグ，ポリュークトなどコルネイユの傑作悲劇の主人公と彼女の間には，明らかに大きな相違がある。第一は動機である。前者の場合，大義の実現には，個人を越えた公共の，あるいは少くとも相当数の人々の幸福と名誉が関っている。これに対しクレオパートルを動かすのは，余りにも個人的な欲望である。第二に，彼女には，他の主人公達が妻や恋人，肉親などに抱いた深い愛情のつながりが欠如しているように見受けられる。野心のために肉親の情を犠牲にしたと言うより，とっくの昔にそうした人間らしさは，彼女の内から消えうせていたと考える方が正しかろう。以上の二点が，所謂四大悲劇の主人公などと較べて，クレオパートルが負うているマイナスの要素であり，彼女への観客の共感を妨げている。

ところで，情勢判断やマキアヴェリズムに表れる彼女の鋭い知性と，その知性をしてもいかんとも抑え難い権力意志との間のアンバランスこそ，注目に価する。愛情が何らかの大義のために否定されることがあるのなら，人間の欲望の一つにすぎない野心もまた，理性の検閲を受けてしかるべきであった。だが，このような考えはついぞ彼女の念頭に浮ばない。それは，たとえば守銭奴が，他の点についてはきわめて合理的であるのに，貪欲と

いう一点において，我々の理解を越えた異常さを発揮するのに似ている。彼女もまた，目的を果すための諸々の判断は的確であるのに，目的自体については何の反省もできない，欲望に憑れた半ば狂える人なのである。

（5）

以上述べてきたことを要約しておこう。

『ロドギュンヌ』の巧みな劇的構成は，クレオパートルというフランス演劇史上でも稀にみる悪徳の権化の創造があって，始めて意味を持つ。手段の善悪はともかくとして，目的を貫徹するために彼女が示す行動力，孤独も天誅も恐れず，人間的感情を蹂りんして進むストイックとも言える態度，己が野心への忠実さには，到底及びもつかぬという意味で，我々の感嘆を誘うものがある。彼女に，コルネイユ劇の代表的英雄と軌を一にする部分があるのは否定できない。

おそらく，コルネイユの時代が，野心に対し我々より寛大であったのは事実だろう。クレオパートルほど極端な形をとらないとしても，彼女に似た傲慢な野心家達は，この時代の大貴族の中に，数多く見い出されたはずである。

しかし，彼女の明析なる頭脳と意志力も，所詮狂える欲望に仕えることしかできなかったという点で，この劇は，人間の偉大さ以上に悲惨さを強く訴えかける。それは，我々すべの内に潜在的に潜む悲惨さと言えよう。

〔注〕

1）Cf. Lancaster (H. G.), *A History of French Dramatic Literature in the Seventeenth Century*, Gordian Press, 1966, part II, vol II, pp.507-508.

2）Cf. *Rodogune*, Classiques Larousse, 1936, p.6.

3）Cf. Corneille, *Théâtre complet*,Classiques Garnier (Ed. M. Rat), t. II, p.314.

4）*Examen* de *Rodogune*.

5）*Ibid*.

6）Corneille, *Œuvres complètes*, Aux Éditions du Seuil, 1963, p.826.

7）Cf. *Avertissement* de *Rodogune*.

8）Cf. Corneille, *Œures de P. Corneille*, Les Grands Ecrivains de la France (Nouvelles Éditions), Hachette, 1910, t.4. pp.403-404.

9）題名の表記については，H. G. Lancaster, *op. cit.*, p.512を参照。

10) Cf. Voltaire, *Commentaires sur Corneille*, dans *Œuvres complètes*, t.54, The Voltaire Foundation, 1975, pp.477-478.

11) Cf. *Œuvres de P. Corneille* (*op. cit.*), pp.405-406.

12) Cf. *ibid*, p.401

13) Cf. H. G. Lancaster, *op. cit.*, p.507.

14) Cf. *Avertissement* de *Rodogune*.

15) *Ibid*.

16) *Rodogune*, Ⅲ, 5, 1051-1052.

17) クレオパートルが唯一，肉親の情に耳を傾けたかにみえるのは，Ⅴ, 1, 1509-1511の台詞である。しかし，これとても彼女が後悔の念に真実捉えられたかとなると，疑わしい。

18) *Rodogune*, 1647-1660年の版では，1682年版のⅤ, 4, 1816行目の後に，この詩句が置かれていた。

19) *Ibid*., Ⅱ, 4, 733-736.

20) *Ibid*., Ⅱ, 2, 463-468.

21) *Ibid*., Ⅳ, 7, 1491.

22) Doubrovsky (Serge), *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, P.297.

23) *Rodogune*, Ⅴ, 1, 1515-1517.

24) *Ibid*., Ⅱ, 1, 403-406.

25) *Ibid*., Ⅰ,1, 47-49.

26) Cf. *ibid*., Ⅱ, 3, 647-652.

27) Cf. *ibid*. 1647-1660年の版では，1682年版Ⅴ, 4, 1816行目の後に次のような詩句が置かれていた。

Je n'aimais que le trône et de son droit douteux/ J'espérais faire un don fatal à tous les deux, /Détruire l'un par l'autre et régner en Syrie/Plutôt par vos fureurs que par ma barbarie.

28) *Ibid*., Ⅱ, 4, 747.

29) *Ibid*., Ⅴ, 1, 1536.

30) *Ibid*., 1525-1529.

31) *Ibid*., 1532.

32) *Ibid*., 1534.

33) Nadal (Octave), 《L'exercice du crime chez Corneille》, *Mercure de France*, janvier 1951, p.34.

Rodogune

Nobuya MURASE

Corneille fit jouer *Rodogune* pendant l'hiver de 1644-1645; elle obtint un grand succès. A part ses quatre chefs-d'œuvre et le *Menteur*, cette pièce est celle qui a été le plus souvent représentée à la Comédie-Française de 1680 au 1942.

L'auteur lui-meme la préférait au *Cid* et au *Cinna*. D'apres ses témoignages, on peut indiquer deux raisons pour lesquelles il avait un faible pour elle.

Premièrement, il revendique avec plus d'insistance la paternité de cette tragédie que pour toutes les précédentes: "*cette tragédie me semble être un peu plus à moi que celles qui l'ont précédée, à cause des incidents surprenants qui sont purement de mon invention, et n'avaient jamais été vus au théâtre*". Sa justification ne manque pas de fondement. La pièce est bien construite jusqu'au 5ème acte, où domine un sentiment de terreur, éveillé par la coupe de poison qui passe de mains en mains. Mais elle paraît avoir quelques défauts qui proviennent peut-être des efforts du dramaturge pour y créer une situation tendue et un suspens: par exemple, il y a une inchoérence frappante dans les actions de Rodogune.

La seconde raison est d'ordre moral; le personnage de Cléopâtre fascine tellement l'auteur qu'il en arrive à dire: "*tous ses crimes sont accompagnés d'une grandeur d'âme qui a quelque chose de si haut, qu'en même temps qu'on déteste ses actions, on admire la source dont elles partent*". On ne sait si un lecteur moderne trouve admirable la source d'où procèdent ses crimes épouvantables. Il est pourtant probable qu'il est touché par le caractère misérable de la condition humaine dont l'héroïne est le témoignage vivant. Car elle ne peut être que prisonnière d'une passion destructrice, l'ambition, en dépit d'une lucidité et d'une volonté qui nous surprennent.